

エンカウンター (ENCOUNTER)

第246号

2022年10月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第2の手紙講解説教」より（2）

信者の悲しみと苦しみを助ける熱情

「そこでわたしは、あなたがたの所に再び悲しみをもっていくことはすまいと、決心したのである。……私自身の喜びはあなたがた全体の喜びであることを、あなたがたすべてについて確信しているからである。（コリントⅡ 2.1-4）

ここには、キリスト教の教理は一つも出てきておりません。しかし、彼の心からほとばしり出る愛情が感じとれる箇所であります。これによって、伝道者の資格というものを考えさせられます。規則正しい生活をしているとか、あるいは、知的にキリスト教の教理を人に伝えているということだけでは、非常に不十分であり、それでは人には福音が移らない。やはり、信者の悲しみと苦しみを自分の悲しみ苦しみとして、それを助ける熱情が伝道者の資格であることが分かります。2千年にわたって、パウロが追随許さざる伝道者となり得た理

由がそこにあるのであります。勿論、パウロの神学が優れていて、一生涯伝道をした事実はありませんが、彼の心の中には、燃え尽くさざる人に対する愛がありました。現代のキリスト教が伝わらない根本的理由はここにあるように思えます。

私達は、キリストの香り

しかるに、神は感謝すべきかな。神はいつもわたしたちをキリストの凱旋に伴ないゆき、わたしたちをとおしてキリストを知る知識のかおりを至る所に放って下さるのである。わたしたちは、救われる者にとっても滅びる者にとっても、神に対するキリストの香りである。(コリントⅡ 2.14-15)

キリスト教は、神とキリストに尽きます。自分の功績ではありません。我々が生きること、頭脳が働いていること、これは、神によってそうさせられているのであります。我々は、我々の力で生きているのではない。我々は神にあって働き、神にあって生き、神にあって存在している。「神を信じる」ということは、自分は無であり、神がすべてであることを知ることです。救いの方においても然りであります。

15節の「救われる者」あるいは「滅びる者」という字は、いずれも現在分詞です。英語訳聖書では、「we are being saved.」(救われつつある)あるいは「we are perishing」(滅びつつある)と訳されています。即ち、救いも滅びも途中にあるという意味です。救いの完成は、我々がこの肉体の生活が終わった時に来ます。この救いの理解というものは、仏教浄土門の救いの理解とよく似ています。途中ですから、人間は生きている間は、救われる方向にも滅びの方向にも、どちらにも行ける状態にあります。ですから危険です。

キリストの香り

この世の滅びゆく人々にとっては、おそらくパウロは外見がみすぼらしく、「死のかおり」がするように見えたと思います。しかし、救われる人には、パウロの姿は、何も持たぬように見えてすべてのものを持ち、悲しみに倒されても滅びず、すべてが命に満ちた生活の人として映ったに違いない。福音というものは、キリストから来る匂いであって、言葉ではなく、パウロの生活から来ます。人の生活からは匂いが出ます。「かおり」の出ている人、顔に後光のさしている人には、自然と頭が下がります。聖書をよく読んでも、日々の生活に現れて来なければ駄目です。「かおり」という字は実によい言葉だと思います。例えば、薬屋の小僧は、倉に出入りしているうちに、薬の匂い、かおりが染み付いて来ます。薬のかおりがしないような小僧は信用出来ません。クリスチャンとは、キリストのかおりが体から出て来なくては駄目です。キリストを信じる時に匂いが伝わって来るといふ。これを福音と言います。賜物です。そしてこの「かおり」は、人を永遠の者にする力です。福音はアクセアサリーではありません。死に行くか、救いに行くかの境目のものであります。この頃の日本の青年男女は、何に精力を注いでいますか。いくら英語や数学を学んでも、それは救いに行くか、滅びに行くかを決定しません。所得が倍増して物質が豊かになっても、上等の文化は生まれません。文化の水準は、国民の中にどれだけ善のかおりのする人がいるかによって決まります。

「do」よりも「be」(どうあるか)

パウロの話の話を聞いていると、我々のキリスト教の理解は、パウロの理解しているキリスト教とだいぶ性質が違うような気がします。パウロの福音というのは、天国、永遠の生命ということ、即ち、救われるか否かが問題となっています。永遠の生命に行きつつあるか、滅びつつあるかが中心になっています。我々は、人に親切にしなければいけないとか、悲しんでいる人を慰めねばならないとか、また、何か善いことをしなければと、いつも、なすこと「do」に引っかかっています。しかし、パウロの説教を聞いてみると、「do」よりも「be」(どうあるか)に中心が置かれています。「be」があるから、そこから「におい」が出てくる。梅檀(せんだん)の木が有れば、良い香りがします。パウロのように永遠不滅の生命を持っている人は、たとえ乞食をしても、何をしていても、持っているものが外へ出て来ます。我々は、胸に手を当てて考える必要があります。我々は喜びや悲しみを問題としていますが、滅びつつあるか、救われつつあるかが問題であります。

「天国への橋」となりたい

一昨日、第一高等学校の百年祭がありました。その時、私の10年以上の先輩、森戸辰男先輩が、恐らく87か88歳ぐらいでしょう、講演をしました。驚いたことに、50分の講演の声は少しも変わらなかった。論旨の明快さもありました。その中で、新渡戸稲造の話が出ました。新渡戸先生の夢、願望は有名な話ですが、「太平洋の橋となりたい」ということでありました。東西の文化のブリッジです。私は、稲造先生の小さな弟子として「天国への橋」となりたいと思っています。この世では、ちっとも善行が出来なくともよい、この世で喜びがなくともよろしい。この世において、平安な心がなくてもよい。ただ、天国へ行く橋となりたい。そして、これはもう私だけではありません。誰でもが橋となれる。先日、天に召された村田スミ姉の如きは、日本の国のために、この社会のために、というようなことは、一言も言われませんでした。……まず、自分自身の存在が、即ち「香り」を放つようになり給え。一人が改まったら、日本の社会が改まります。……これは可能です。福音を勉強して、福音が我々のものになったら、自然とそうなります。諸君、これから一緒に聖書を勉強しましょう。聖書の勉強を抜きにして、そのような人になる方法はありません。「信仰は聞く事から生じ、聞くことは神のことばによる」とパウロは言いました。我々は、神のことばを聞き足りません。まだ、勉強がたりません。

キリストの紹介状

「わたしたちの推薦状は、あなたがたなのである。それは、わたしたちの心にしるされていて、すべての人に知られ、かつ読まれている。そして、あなたがたは自分自身が、わたしたちから送られたキリストの手紙であって、墨によらず、生ける神の霊によって書かれ、石の板にではなく人の心の板に書かれたものであることを、はっきりとあらわしている。」(コリントⅡ3.2-3)

信者は伝道者から神によって生まれるわけでありまして、伝道者が如何に重大な役目をなすかということを感じます。現代日本に置いて、キリスト教信者が多くの点において聖書の信仰を解していないとすれば、現在の信者に信仰の道を伝えた伝道者に責任があると思います。信者は伝道者の紹介状みたいなものであります。ですから、この教会で信仰を持たれるとすれば、それは私の伝道によって神が作り給うた信者と見てよいと思います。聖書の福音を学ぶ我々信者は、伝道者の紹介状でありますけれども、キリストが伝道者を通じて働き給うのでありますから、キリストの紹介状とも言えます。未信者の方々が、キリスト教とはどういうものであるかを知るためには、まず、信者を見ます。我々を見て、キリスト教とは、ああいうものであるかということになる。従って、世人に対して、我々はキリストの紹介状であります。我々の責任は誠に重い。

仕事の原理

こうした確信を、わたしたちはキリストにより神に対していただいている。

(コリントⅡ 3.4)

この日本語の訳文は誠に原語に忠実であります。普通であれば、「私たちは、キリストにより神に対してこうした確信を抱いている。」となります。訳者は原語に忠実に、「こうした確信を」と初めに持って来ています。ギリシア文では、最も大切な言葉が最初に出て来ます。文章の力がそこにこもっています。次に大事な言葉が文章の最後に出て来ます。原語では、「神に対して」という字が最後に来ています。あなた達は神が聖霊をもって書き給うた手紙であるという確信を、私は人に対してではなく、神に対して持っている、という。これは、伝道者の本領です。人を相手としていません。これは伝道だけではない。すべての真剣な仕事は人を相手としては出来ません。人の毀誉褒貶（きよほうへん）に目を置いては真剣な仕事は出来ません。この原理は、すべての仕事、家庭における小さな仕事でも同じことでもあります。

神の方からの賜物

他の宗教は、自分の知的努力によって人から神に至ろうとする。あるいは、道徳的努力によって神に至ろうとします。要するに、人間の努力をもってして神に至ろうとします。これが他の宗教の行き方です。信仰という人間側の決断によって、信仰という冒険を犯して神に至ろうとする。あるいは知的に努力して神に至ろうとする。両方とも、信仰的努力という点においては同じことです。ここをしっかりと聞いておく必要があります。信仰ということで、信者はつまづきます。何十年経っても、この信仰がはっきりしていないために、信仰的な努力が必要と思っています。それは他の宗教です。信仰的あるいは道徳的努力をもって神に至らんとするというのが、普通の人間の、他の民族の宗教です。

しかし、イスラエル民族は、契約とは神の方からの啓示であるという。神がイニシアチブ、発意を取って、内容は神が決めて、賜物として下されたという。これが旧約の契約という概念なのであります。これが人類の宗教史上、ユダヤ民俗の最も大きな貢献といえます。新約の原理もこれに尽きています。人間側の道徳的、信仰的努力を要求しておりません。神の方から賜物として、内容を決めてくださった。パウロがいつも言うところの賜物はこれであります。

永遠不滅の生命を持つ人は、この世から輝く

そこで、ここに第2の契約が現れます。新約が現れます。イエス・キリストは最後の晩餐で、「この杯を飲め、これは我が血における新約である。」と言われました。即ち、これは罪の赦しであります。第1の契約において、どうしても実行出来ない我々の罪を赦して、我々に永遠不滅の生命を与えるという契約であります。これが新約、第2の契約であります。これをパウロは説きました。パウロの専売特許であります。その理由の一つは、パウロが第1の契約を真剣に行なったからであります。真剣に取り組んだがどうしても出来なかった。「お哀れなる我よ、我が死の身体より救わん者は誰ぞ」と言って、天を仰いだ時、ダマスコ途上において、イエス・キリストの復活と出会った時に、この第2の契約が彼に示されたのであります。イエス・キリストの罪の赦しと永遠不滅の生命を頂くこと、これが新約の内容です。

第1の契約の伝道者であるモーゼは、光栄に満ちているけれども、第2の契約の成就者イエス・キリストおよびこの福音を宣べ伝えたパウロ以下の伝道者の光栄は、モーゼの栄光の如く一時的なものではなく、永遠的な輝きを持つと言う。パウロのみではない。この第2の契約を信じ、受けるすべての信者には、永遠の輝きがあります。永遠不滅の生命を持つ人は、この世から輝いています。顔を見たらわかります。

受けるだけ

第2の契約もまた、神の発意により、その内容は神が決め、賜物として我々に迫っています。我々の知的、道徳的、信仰的努力を要しません。賜物として信じて受ければよい。受けるだけです。これが福音のもっとも大事な点であります。何十年も求める必要はない。直ちに、我々永遠の生命を受ければ足る。イエスキリストを仰げば足る。「わが主イエスよ」と口で称えれば足るのであります。

この第2の契約の内容を展開したのがロマ書です。ロマ書の大部分は、第2の契約の内容を説明したに過ぎません。

私は毎日、内村先生の「一日一生」を読んでいます。本日11月15日の文章は、ちょうど新約と旧約の説明にあたっていました。説明の助けになりますので、ここで拝読させていただきたいと思います。

「……言うまでもなく宗教の本領は来世である。政治、経済の本領が現世である如くに、宗教の本領は来世である。来世を明白に示さず、これに入るの道を明白に教えない宗教は、宗教と称するに足らざるものである。宗教は人を現世の外に導き、彼の来世獲得の道を供して、間接にしかも確実に現世を救うのである。」

新約に示された栄光

永遠の栄光は永遠に続く。この世における金メダル、スポーツの金メダル、また学問上においてノーベル賞、あるいは勲一等とかの勲章など、この世における栄光は、色々あります。これらを栄光でないと言うのは間違いです。栄光でありますけれども、これをパウロの言う、永遠の生命の冠に向かって我は走るといふ永遠無限の神の賜物に比べれば、その栄光は一時的な栄光であって、それは栄光と称えるに足りません。旧約も栄光、しかし、新約に示された永遠不滅の栄光に比べれば薄い。この世の富、地位、名誉は栄光です。しかし、不滅の栄光に比べれば、塵の如きものである、とパウロは結論しました。

イエス・キリストは新約の製造者、説明したのがパウロ

新約と旧約の区別は、お分かりになったことと思います。パウロは数十年にわたって、正直と勤勉とをもってこの第1の契約と取り組みました。そして第2の契約を神から示されました。我々誠に小さい者でありますけれども、神から与えられた正直と勤勉をもって、我々に与えられた仕事と取り組みたい。そして我々分相応に人々の為になるような人間になりたい。アブラハム、モーセ、パウロと人類の歴史において、こういう流れになるのでしょうか。イエス・キリストは新約の製造者、これを理解して、説明したのがパウロであります。薬に例えたら、イエス・キリストはストレプトマイシン、これを飲んで結核が直って、これを説明したのがパウロ。私は、君達が一人もここで説く私の福音を信じなくてもよろしい。私は死ぬまで、キリストが我々の罪のために十字架に死んで、我々に永遠不滅の生命を与えて下されたと、そのことだけをここで説きます。君らの信仰を私は問題にしておりません。